

研究雑感

創設間もない頃の思い出

神谷 宣郎

(基礎生物学研究所名誉教授)

基礎生物学研究所の設立は長い間わが国生物学者の夢であったが、その実現に向けて学会や学術会議が熱心な討議を重ねたのは昭和39年頃からであったと思う。先輩の先生方のたゆまぬ御骨折と第一線の研究者の熱意が実を結んで、待望の本研究所は昭和52年5月に誕生した。設立に至るまでの詳しい経緯や設立後研究所の陣容が年を追って拡充されて行く経過については、正確な資料に基づいて別に記されることと思う。ここでは設立後間もない頃本研究所で過した所員の一人として、当時のことを思い出すままに記すことにしよう。

新しい研究所の発足はささやかではあったが希望と抱負に充ちたものであった。創設と同時に桑原万寿太郎所長と金谷晴夫教授が着任し、私はやや遅れて同年7月に着任した。初年度の固定部門は生殖研究部門と細胞機構研究部門、これに客員部門として情報制御研究部門があった。まだ建物はなかったから、生物科学総合研究機構は愛知教育大学岡崎分校で使われていた図書館を仮庁舎として使用した。この建物は大きくはなかったがきれいな3階建てで、現在陸生動物室やRIの実験室などのある共通施設棟の辺りに建っていた。ここに基生研と生理研が同居し、同じ建物の2階には勝木機構長、桑原・内菌両所長の部屋があった。すでに2年前から分子研がこの建物を研究室および事務室に使っておられたため、適当な間仕切りもでき、実験室としての一応の配線、配管、冷暖房の設備もあって住心地は悪くなかった。当初は実験器具らしいものはほとんどなかったからスペースには困らなかったが、このような状態は長くは続かなかった。

まずこの仮庁舎で過ごした頃の身近な思い出をいくつか述べよう。私の部屋は3階の金谷さんの隣りでベニア板の壁で仕切られていた。ここですぐ気付いたことは、金谷さんの話し声が実によく聞えることであった。彼の声が大きいと思ったが、それだけでもなかったようだ。あるとき私の部屋に内線番号を間違えた電話がかかった。“それでは電話を先方に回しますが、まわし方がよくわかりませんからしばらくお待ち下さい”といったら、これが隣室にいた金谷さんの秘書嬢にすっかり聞こえたらしい。彼女は矢庭に私の部屋へ駆けつけて電話を先方に回してくれた。防音効果ゼロの間仕切りの便利さをしみじみ味った次第である。この機敏で善意に溢れたお嬢さんは小笠原淳子さんと云い、現在は渡辺正勝氏夫人である。当時の人にはケロちゃんといった方がわかり易いであろう。

この頃は新しい研究室の設営準備などで来訪者が割合多かったが、ある日の夕刻、本研究所創設の恩人の一人である故二国二郎先生が、近くまで来たからといって寄って下さったときは嬉しかった。少々アルコールでも入ると、部屋の雰囲気はすぐ隣室へ伝わる。すると金谷さんがニコニコしながらニューッと顔を出し気分は益々高揚する。こんなことがよくあったが、今は皆なつかしい思い出であ

る。

当時はまだ食堂もなかったので、昼食は大抵出前の弁当であった。2階の受付横の小さな応接所に勝木機構長、桑原・内菌両所長の他山岸さんや私が昼食時になると集った。時々臨時の来客もあり、話題もいろいろあったが、今でも思い出すのは鳥の鳴き声のことである。昼の食事時になるとすぐ近くでよく鳥が鳴いた。大きくきれいな鳴き声であった。あの鳥は何だろうということがすぐ話題になったが誰もあまり自信がない。結局、岡崎にはさすがにまだ自然がありますね、というようなことで皆さん意見が一致した。ところがこの話はまだ後があるのである。この頃すでに基生研の第一期工事が始まり、仮庁舎の横には建築を請負った藤田工業の飯場ができていた。2・30人もいたであろうか、昼過ぎになると作業員が皆飯場の前に集合し、テープの音楽と号令に合わせて一斉にラジオ体操を始めるのであった。われわれが聞いた鳥の鳴き声は実は体操開始の合図だったのである。それがスピーカーから流れていることがわかったのはまだしばらく後のことであった。

しかし研究所の構内に今より自然が多く残っていたことは事実である。昭和53年の春頃だったと思う。たまたま何かの用事で東の空が白む頃帰路についたことがある。このとき研究所の玄関を出るとすぐ前の広場をキジがゆっくり横切っているではないか。かなり近づいても驚く様子もなく悠然と東の方へ歩いて行った。これは本物だった。あのキジはその後どうしたのだろうか。

私の属している細胞機構部門では、創設の年の12月に黒岩助教授と吉本助手を迎え、翌53年には1名の技官と特別奨励研究員も配属されて、1階の実験室はやがて人と物とで身動きできぬ程になった。実験の方もこの頃からどうにか軌道に乗り出した。創設期には研究上の制約は勿論いろいろあったが、一方ではまた未完成時の夢と楽しさもあった。この頃の研究の具体的な内容については基礎生物学研究所年報第1号1-16(1982)に記されているのでここには触れない。

昭和54年の春にはいよいよ本建築の第1期工事が完成した。当時は未設置の部門がまだ沢山あったので新館にはスペースのゆとりがあった。最初の計画通り、この建物をひとまず生理研と共同で使用した。新しい建物は立派で設備もよく整い、日本で望みうる最高の研究環境に恵まれているように思われた。いよいよできたという緊張と責任感を新たにしたものである。

しかしここに移って見ると、各部屋は厚いコンクリートの壁で隔離され、隣室の人声も聞えない。機構長や所長は管理棟に移られたので、昼食時にお会いする機会もなくなった。同じ部門の人々以外には人間的なふれ合いが急に少なくなったような気がした。しかし考えて見ればこれは当り前のことであろう。研究所に限らず、一つの組織や機構が狭い殻から脱皮し成長するとき、いつまでも家族的な体制を維持することは許されないのかも知れない。

新しい研究棟に移ってからの思い出も多いが、ここには基生研コンファレンスについてだけ簡単に触れよう。すでに研究所設立の初年度から“分裂構造の形成と細胞増殖の制御に関する研究”が特別研究として発足し、これに続いて翌53年度には“細胞運動の機構”が発足した。何れも5ヶ年計画で、毎年一回それぞれの主題について基生研コンファレンスが開かれた。私が関係したのは細胞運動の方で、所外からは石川春律氏他数名の方々に協力をいただいた。このコンファレンスの2回目(54年度)からは2・3名の外国の学者を招く予算がついたので、基生研コンファレンスはこのときから小規模

ながら国際会議となり、公用語も英語にすることにした。果してうまく行くかどうか最初は不安であったが、いざやって見ると若い人の多くは英語が達者で意外に度胸もあり、外国のお客さんもよく発言して会議は予想以上に盛り上った。5ヶ年続いた細胞運動の基生研コンファレンスは私の退官後平本氏が中心になってこれを組織され成功裡に完結された。

この頃会場に使える場所は玄関近くの会議室しかなかったので、参加者を50名程度にしぼらざるを得なかったし、また招へいできる外国人の数も少なかった。しかしそれだけにかえて密度の高い会議であったともいえる。著名な海外の学者と面識を得、膝を交えて意見を交換する十分な時間をもったことは、わが国の研究者にとって、とくに若い研究者にとってはよい刺激になり、測り知れないメリットがあったと思う。基生研コンファレンスが直接間接の契機となって米国に留学の機会を得たり、彼地に職を得て現在活動中の人も何人かいる。

このコンファレンスに参加した外国の学者の中には、すでに来日の経験のあった人もいたし、初めての人もすくなくなかった。基生研コンファレンスは彼等にとっても日本の関係分野の研究者や研究活動を身近かに理解するよい機会であったと思う。昭和55年細胞運動の基生研コンファレンスに外国人としてはじめて参加した3名の米国の学者は、この頃創刊された専門誌 *Cell Motility* (Alan R. Liss, New York 発行、現在の誌名は *Cell Motility and Cytoskeleton*) に連名でこの会議の様態を詳細に報告している。基生研が当時外部からどのように見られたか、次に報告の一部を転載しよう。

The site of the conference, the NIBB in Okazaki, has become a showcase for modern biological science in Japan. The Ministry of Education has invested vast resources in space, special facilities, major and minor equipment and everything else that makes for good science. Some of the best young scientists in Japan are working there (many after a period of training in the U. S.). It is clear that basic research in biological science is alive and well in Japan, and is destined to prosper in the coming years. It is also clear that young American scientists will find Japanese institutes like the NIBB, as well as many Japanese universities, increasingly attractive locations for postdoctoral training and sabbatical leaves. (R. D. Allen, J. Rosenbaum & E. D. Salmon. 1980. *Cell Motility* 1:159-162 から)

私が基生研を退官してからもう6年になる。退官後も共同研究その他で本研究所にはしばしばお世話になって来たが、創設当時を思えば10年後の今日、研究所は見違えるほど成長したものである。歴代の所長をはじめ関係各方面の御尽力と御支援によって、当初に計画された部門はすべて設置され、立派な建物も完成した。恵まれた研究環境のもとですぐれた研究成果が今や続々と挙げられていることと思うが、創立10周年を一つの節目として基礎生物学研究所はいよいよ本格的な活動期に入ろうとしている。共同利用研究所としての実を挙げながら、すぐれた所員の英知と協力によって本研究所が益々名声を高め、国内的にも国際的にも新しい生物学研究の一つの中心的存在となることを願って止まない。